



私の視点

映画「天使にラブ・ソングを…」などで日本でも知られる米国の俳優ウーピー・ゴールドバーグが1月末、自身がメインキャストを務めるトーク番組で「ホロコーストは人種問題ではない」と発言し、物議を醸した。ABCテレビは彼女に2週間の出演停止処分を言い渡した。彼女は別番組で「黒人である私にとって人種とは目に見えるものだから」と釈明しようとしたが、自身のさらなる偏見をさらけ出しただけだった。

数多くの批判が指摘しているように、ホロコーストは「人種」に基づく虐殺であった。「アーリア人種の優越性は神の意思によるもの」と考えたヒトラーは、最も危険視した「ユダヤ人種」を人種階梯の最下位に位置づけた。自分たちの「純血」を守る名目で、推定600万人のユダヤ人を含む大量虐殺を行った。

ユダヤ人虐殺はナチズムによる一過性の大惨事ではない。前近代から、ユダヤ人は生まれながらにしてけがれた血をもつとされ、虐殺や暴力の対象とされてきた。その中には、ホロコースト同様、キリスト教徒への改宗者が含まれていた。つまり宗教迫害ではなく、抹消すべき人種だとみなされたからだ。

誤解のないように付言すれば、ここでいう人種とは、今日の遺伝学的見地からは否定されている生物学的概念ではない。生まれながらに「異なる」と信じられ、劣等視されてき

社会的に作られる認識を

「人種」は見えるものか

た、社会的につくられた「人種」を指す。人種差別と格差が歴然と存在する以上、社会的人種を語ることは不可欠であり、彼女の発言をめぐる議論ではそれが前提とされている。

さて日本でも、政治家らが度々吐露するように、「日本には人種差別はない」とする考えが根強く残っている。人種といえば、黒人のような外見の異なる集団を指すもの、日本に黒人はいない、だから日本に人種差別はない、という何重にも誤った解釈だ。人種概念を欧米から受容した幕末・明治初期にさかのぼる時代遅れの解釈である。しかし在日コリアンや中国人らに対する差別や偏見には、単に文化や慣習だけではなく、「日本人とは血が違う」、つまり生まれながらにして能力や気質が違うとする偏見に満ちた人種観が見受けられる。「〇〇は日本人のDNAに埋め込まれている」といった表現も、場合によっては危険な思想につながりかねない。

ヘイトスピーチや就職差別、入居差別などを含め、日本社会における「目に見えない」マイノリティーに対する差別も、明らかに人種差別撤廃条約に違反する。この認識が社会に広まるのが、人種差別解消に近づくための第一歩だ。

◆投稿は手紙か siten@asahi.com

へ。採用の場合、ご連絡します。

電子メディアにも掲載します。